



巻頭言

年頭にあたって

所長 増子 昇
Noboru MASUKO

1988年の新春を迎えて皆様にご挨拶申し上げます。

生産技術研究所は工学系の総合研究所であり、大学の特色である研究者の自由な発想に基づく創造的研究を基盤として、科学技術の進展に着実な貢献をしております。特に最近の新しい科学技術の研究分野が、多くの専門領域にまたがる学際的なものとなっていることを反映して、工学全般を広く包含する生研の組織力・機動力に国の内外から大きな期待が寄せられております。われわれはこの期待に応え、技術と情報の時代における日本の学術文化の興隆に寄与し、また国際交流を通じてそれを世界に分ち合うことを使命と考えております。今年もまた所内の教官・職員・学生各位の一層の努力と活躍を期待致しますとともに、所外の皆様の生研に対する一層のご理解とご協力をお願い申し上げます。

現在東京大学では、研究機関としての施設・設備の強化、研究経費の充実を目指すとともに、大学院に重点をおく教育態勢を作るべく、いわゆる「学院構想」の検討をおこなっています。いわば東京大学が挙げて、われわれの日ごろから努力を重ねてきた方向に向けて展開を計ろうとしているとも言えるのであります。昭和24年5月に、教育を主とする第二工学部から研究機関としての生研に転身して以来約40年になろうとしています。この間に関係者の血のにじむような努力で築き上げた生研の伝統と文化が東京大学の将来にとって一つの模範となろうとしている現在、さらに一歩先んじてこれからの進路をリードできるように知恵と意欲を働かせていきたいと考えます。

教育には「ものさし」をつくるための力が必要とされるのに対し、研究には「ものさし」をこわすための情(こころ)が必要になります。現代の「変化の時代」を駆動できるのは研究であり、研究に基盤を置く情報であると存じます。情報の交流と育成には、人の集まる便利な場所と、核になる研究が必要です。都心に立地する生研に培われた「自由で創造的な研究の場」が必然的に科学技術情報の中心になるゆえんであります。昨年10月には学術情報センター長の猪瀬博先生に当所の研究顧問をお願いし、われわれの果たすべき役割を自覚しながら、情報の交流に力を入れていく態勢をととのえることとしました。

昨年の方頭のご挨拶で「(生研は)外部的には将来の進むべき道に関して何らかの選択を迫られることになる」と申し上げました。幸いと申し上げるべきかと存じますが、昨年はあまり表立った動きはありませんでした。「葉隠(はがくれ)」の「聞書第一」に「大事の思案は軽くすべし、小事の思案は重くすべし」とあります。大事については、まえもって十分に検討をしておき、その場に臨んでは簡単に態度をきめるのがよい、古人の詞にも七息思案(思案は息を七つするほどの間にきめるもの)ということが、ある、ということですが、これに反して、小事のほうはいろいろな要因で始終条件が変化するので、油断なく重厚な対応をする必要があります。もって範とするつもりであります。

生研の特長は、個々の研究室が個性と実力をもって、のびのびと活躍しているところにあります。今年もまた大いに頑張らしましょう。